審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	乙 第 2785 号	氏名	山口 圭三
審査担当者	主 査	大島孝一	(印)
	副主査	鹿毛政義	(印)
	副主査	鶴田 修	(印)

主論文題目：Identification of high-risk factors as indicators for adjuvant therapy in stage II colon cancer patients treated at a single institution
（単施設で治療されたII期結腸癌患者における補助療法の指標としての高リスク因子の同定）

審査結果の要旨（意見）

II期の結腸癌患者における術後補助化学療法において、カットオフ値の2倍の血清CEAレベルと術前腸閉塞症は、II期結腸癌の治癒切除後の再発危険因子であり、補助化学療法実施の必要性を評価する指標としても有用であることが、今回の研究により示されている。
この研究は、結腸癌患者における術後補助化学療法への取捨選択へも応用が多いに期待される成果である。審査にあたり、主査・副査より、今後の展開、また実験系の可能性に対する質問にも的確に回答が得られている。この論文は充分に学位に値するものと考えられる。

論文要旨

II期の結腸癌患者における術後補助化学療法は、再発の高リスク群だけに推奨されているにもかかわらず、高リスクの定義は不明瞭なままである。本研究の目的は、治癒切除を受けたII期の結腸癌患者の臨床病理学的因子の解析により再発危険因子を特定することと特定された再発危険因子を有する患者群で補助化学療法の効果を検証することである。

1982～2005年に久留米大学病院で治療を受けた377例のII期結腸癌患者から集められたデータの内、補助療法を受けなかった214例の患者群（手術単独群）における再発危険因子を同定した。次に同定した再発危険因子を有する患者群において、補助療法の有無が再発に与える影響を検証した。

手術単独群における再発危険因子は、カットオフ値の2倍の血清癌胎児抗原（CEA）レベルと術前腸閉塞症であった。補助療法はいずれの危険因子も有していない患者群291例（low risk群）では再発に影響しなかったが、いずれか一方もしくは両方の危険因子を有する患者群86例（high risk群）では、再発を抑制した。

カットオフ値の2倍の血清CEAレベルと術前腸閉塞症は、II期結腸癌の治癒切除後の再発危険因子であり、補助化学療法実施の必要性を評価する指標としても有用である。